

D-1 家訓にみる近世庶民の家庭教育観
京都女大家政 藤江真子

目的 日本人の家庭教育観を各方面から歴史的にとらえ、比較研究によって現代日本人の家庭教育の源流を発見する。

方法 現代日本人の倫理観・家庭思想に大きい影響を与えてきたと考えられる近世に着目し、当時の各種文献による調査研究をした。特に、町人の家思想の高まりと共に、家の存続・発展を願ひ、その実現を期して作られた家訓・家則・家法をもとにこの時代の育児・家の職業教育・しつけなどの諸問題について研究考察した。

結果 古くから公家・武家で作られていた家訓は、江戸時代享保期(1720年頃)以後、町家でも盛んに制定されている。前期は儒教思想の影響を、後期は石門心学の影響をうけたものが多し。家訓は世襲制社会の中で家業意識の高まりと共に、家庭教育の中核となり、生活の指針となった。その根本目的は家業大事の思想に支えられ、家の存続・繁栄のための心得を書きのことすことであつた。そのため多くの家訓は「身の程(分限)を知り、他の職業を羨む事なく、祖先のたてた家業に励み、奢侈贅沢・趣味的生活をやめよ」と述べている。そのために、こどもは①寒暑に耐え、労働し、心身を鍛練する。②幼少より友を選ぶ。③10才頃よりよき師につけ手習いをさせ、家業をおぼえ、15~16才で成人と交遊せしめよ。と説いている。また10才頃より、生家から他家に奉公に出し、男子は知識や技術を、女子は行儀作法を見習わせている。生家における甘え・わがままがこどもにとってよくないという考えから、他家におけるきびしいしつけを求めたのである。家庭教育の限界を知つての方法とも考えられる。しかし、あくまでも「家」のための教育が中心であつた。